



教訓「行動変える力に」

歴史家の長野さんは、100年前のスペイン風邪の流行状況と社会的影響を新聞記事をたどって調べています。

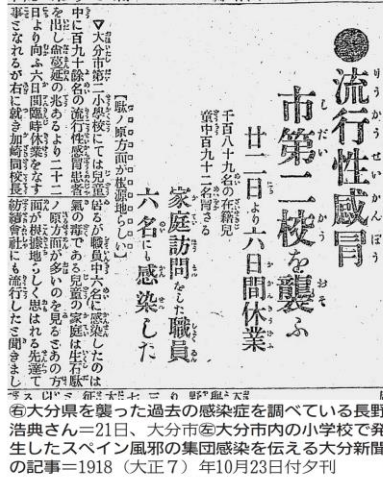
①写真はスペイン風邪の県内第1報とみられる記事です。当時県内では、この感染症に対してどのような見方をしていたのでしょうか？

楽観視
されていたようだ。

②この記事から9カ月後(1919年7月)、県内の感染者の累計数と死者はそれぞれ何人になりましたか？

感染者 約 3.0万 人
死者 5629 人

③この記事を読んで、あなたが感じたこと、考えたことを書いてください。



多数の死者を出した100年前のスペイン風邪は大分県でも猛威を振った。世界的な感染拡大と医療、社会の混乱はコロナ禍に重なる。当時の新聞記事をたどって大分県内の流行状況と社会的影響を調べている元高校教諭の歴史家、長野浩典さん(59)が大分市政所では「過去の教訓から多くを学べる」と指摘する。

100年前のスペイン風邪調べる大分市の歴史家

現代と重なる混乱も

新型 コロナ

「港から県内に」

スペイン風邪は大正中期の1918〜20年に3度の流行があり、全世界の死者数は5千万〜1億人に達したとされる。県内も巻き込まれ、大分新聞や豊州新報(いずれも大分合同新聞の前身)は連日のように流行病の脅威を報じた。長野さんは「大分港から県内にウイルスが入った」と考えている。瀬戸内海を通る関西航路の終点口で、当時関西航路の玄関口で、病原体の運び役となる人の往来や物流が盛んだった。1879(明治12)年に

当時、脆弱な医療体制 大分県 高い死亡率

公的な記録からは、大分県の死亡率の高さが浮かび上がる。当時の感染対策を担った内務省衛生局発行の「流行性感冒」によると、第1波の県内死者数は5629人。人口に占める割合は0.63%で全国ワースト7位、患者総数に占める割合は1.86%で同4位だった。背景には医療体制の脆弱さがあつたようだ。特に地方は深刻で、重岡村(現佐伯市)を取り上げた新聞記事は人口の半数に当たる1500人が発病したのに対し、医師は1人しかいなかったと報じている。他県より早い感染の広がりもあった。東京都健康安全研究センターがスペイン風邪を分析した報告書(2005年)は「1918年10月に大分県で756人の死者を記録した後、急速に各県で死者が増加した」と記述。怖さを認識していない流行初期に、被害が拡大した可能性がある。

愛媛県から始まったコロナが大流行した際、九州最初の感染者が大分県で見つかったのも同じ理由とみる。薬局に市民殺到 スペイン風邪の県内第1報とみられる記事は、大分新聞の1918(大正7)年10月23日付夕刊だった。大分市西部の小学校で流行性感冒の集団感染が発生

した」との内容で、「症状はインフルエンザとしては軽い方(校医)と楽観視されていたようだ。その後、状況は悪化。同紙に載る感染者の累計数は3万2361人(同年11月4日)、4万5千人(同5日)、10万6845人(同9日)と急増する。第1波(18年8月〜19年7月)の県内の患者は約30万人に上り、感染で倒れる医療関係者も続出したという。特效薬はなく、薬局には解熱剤のアスピリンを求め市民が殺到。値段は倍以上に高騰した。熱冷ましの水も品切れになった」と当時の紙面は伝えている。

第2、3波を警戒 新型コロナウイルスも 第2、3波が警戒される。100年間で医学の進歩はあっても「医療崩壊」の懸念は現代もつきまとう。九州の感染症について執筆中の長野さんは「未知の新興感染症がいつ流行しても不思議ではない。歴史にも基づく知識は私たちの行動を変ええる力がある」と話している。(田尻雅彦)

新型コロナ 大分県の状況

23日		累計	
感染者数	0	60	死亡 1 退院 57
PCR検査数	27	3828	

※県発表、単位は人